

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	「不思議」というワクワク感から始まる食育の効果				
研究組織	代表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	副島 里美
	研究分担者	所属・職名	食品科学部・教授	氏名	市川 陽子
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	副島 里美

講演題目	食育による子どもの学びと保護者意識の検討 －保育所での食育活動による一例より－
------	--

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究の目的】
 本研究の目的は、コロナ禍の中で、食事によるコミュニケーションの機会が減少する中での食育のあり方を考えること。特に地産の野菜を使った保育実践において、子どもにとって学びの深い食育となるための保育者の保育実践のあり方について検討すること、である。

【成果】
 東海地方 M 市の 2 園（5 歳児クラス）で野菜を使った保育実践を行った。実施は 6 月 8 月および 10 月の合計 3 回である。また、実践の 2 ヶ月後の 8 月 10 月および 12 月には、保育実践で使用した野菜を使ったレシピを給食で提供した。この 12 回（実践 3 回×2、給食提供 3 回×2）の実践について、フィールドワーク、および関係者にインタビュー調査（合計 3 回）、保護者にアンケート調査（合計 3 回）を行い、子どもたちの学びの度合い、および保護者の食育に対する意識について検討した。
 結果、子どもの食（野菜）に対する学びの度合いは、保育者の食育に対する継続的な関わりや意識の高低と相関が深かった。つまり、本研究で行った保育実践時はもちろん、それ以外の日常保育の場において、継続的に子どもたちの意欲を高める保育実践やことばがけを行いことにより、子どもたちは野菜に対して深い学びを得ていた。また、保護者は本研究における食育活動を、「効果があった」と見ていた。それは、子どもたちが帰宅後、「美味しかった」、「また食べたい」などの肯定的なことばを発していることと相関が高かった。保護者が食育活動について肯定的なイメージを持つためには、①園で行う食育活動を伝え（ドキュメンテーションなどが有効的）、②家庭でも園での出来事について会話をする場を推奨していくこと、また、③家庭で実践について話をしたか否か、について園でも子どもたちにフィードバック（話す）を行う、といった循環を作ることが有効であると思われる。

【今後の展望】
 食育にかかわる保育実践として、絵本を読む、キッキングを行うなどの実践は多くの園で行われている。しかし、子どもたちの学びは同じねらいを継続的に行うことで学びが深くなり、その学びを保護者も共有していることが明らかとなった。今後は長期間を見越した食育計画のプランのあり方について考えていきたい。